地域情報（県別）

【新潟】特養と障害者グループホームも運営し、医療介護連携図る-野沢有二・Omni Color Opus代表に聞く◆Vol.3

「へき地医療を気楽に楽しめる仕組みつくりたい」

2025年11月24日 (月)配信 m3.com地域版

「親父が築いた地盤を継いで、地元でやっていこう」――。医療福祉グループ「Omni Color Opus」代表の野沢有二氏は2012年、父の急逝を機に新潟に戻ることを決意する。父が設立した社会福祉法人の理事長を担い、介護事業に着手。地域ニーズを考慮して障害者グループホームも3つ立ち上げた。そして、自身の活動を示すブランドをつくり、佐渡市の医療状況を知ってほしいとイベントを開催。「へき地医療を楽しめる仕組みをつくりたい」。ビジョンはさらに広がる。（2025年10月2日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら
▼第2回はこちら

野沢有二氏

――野沢先生は2012年にお父さまが急逝したのを機に、故郷の新潟に戻ることを決意したといいます。以前からライフプランとして考えていたのですか。

いいえ、父が生きていればおそらく今も父島にいたのではないでしょうか。新潟に戻ったのは、「親父が築いた地盤を継いで頑張っていこう」と考えが変わったためです。私は過去、地元があまり好きではなく、むしろ嫌いに思った時期もありました。そんな私でも帰巣本能と言いますか、それに近いものがあったのかもしれません。

父への思いもありました。父は「奉仕と慈愛」という理念を掲げて社会福祉法人「有徳会」を立ち上げ、特別養護老人ホーム「有徳の家」を新潟市西区に開設しました。亡くなったのはそれから1年足らずなので、私がすぐにつぶしてしまうのは申し訳なくて。地元で医者をやり続け、時代の変化を鑑みて介護事業までやろうとしていた父の思いを汲みたいと考えました。

特養を運営することで急性期病院との連携がスムーズに

――先生はその後、有徳会の理事長として2つめの特養「Luana（ルアナ）」を2020年に開設します。

介護事業を継続してそれを広げたのは、父の志があったほか、私が父島と佐渡でへき地医療を続けてきたことが大きいです。へき地は人的リソースが乏しいため、多職種で連携して住民の暮らしを支えていく必要があります。父島

にいた時は多職種連携が重要な在宅医療も行い、公的機関の産業医を務め、役所や保健所の職員、介護職の人たちと要介護認定の審査にも携わりました。島では私たち医療者と住民との距離が近いので、「～さんが脚立から落ちて動けなくなったから来てくれ」などと電話があれば、「先生、行きましょう」と職員と一緒に診療所が保有する救急車を使って現場まで飛んでいきました。

人を横断的に診て、地域を面でみていく――。その重要性を父島と佐渡で体感したことが、医療と関わりの深い介護事業を行っている大きな理由です。実際、特養を運営することで急性期病院との連携はとてもスムーズになりました。一般的に、病院は病床回転数などを考慮し、介護施設から患者さんを送られることに難色を示すケースがあります。治療はできたとしても、その後、帰す場所に困ることがあるためです。しかし、私たちは自前で施設を持っているので「治療後に直接戻していただいて大丈夫です」と伝えることで病院にすんなりと受けてもらえています。病院で急性期医療を行った後はすぐに当施設に戻してもらい、必要な医療的ケアは可能な限り施設で提供しています。

また、特養では法人の理事長とは別に嘱託医がいることが多いのですが、この場合、医師にあまり熱が入っておらず、医療と介護の連携が疎かになるおそれがあります。その点、当法人では私が嘱託医も務めているので、密に連携を取れることも利点です。

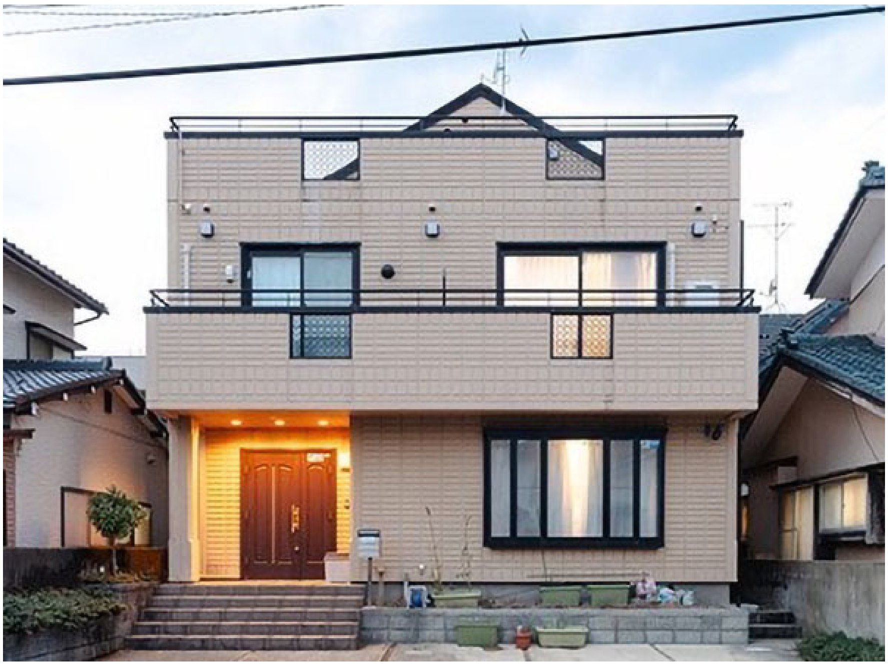
特別養護老人ホーム「Luana」の内観

障害者の作品に感動「暮らしの場を提供したい」

――先生は2つ目の特養をつくった後、株式会社の役員に就任して、障害者グループホームの開設・運営にも携わっています。

直接的なきっかけは、芸術作品との出合いでした。あるセミナーに参加した際、会場に飾ってあった絵に釘付けになったんです。牛をカラフルなパッチワーク風にデザインしたもので、とても個性的でした。作者を見ると、その方が障害を抱えていることを知ってさらに驚きました。私は普段、絵画を見る趣味はありませんが、この体験は衝撃的で障害者の能力の高さに感じ入ったのです。そして、想像しました。「この人たちに住む場所を提供して、入居者の中から世界に羽ばたく人が出てきたら……」

以前から障害者を支える施設が地域に不足していることを問題に感じていました。障害者が適切に診断され、社会で認知されるようになったことでその数は増えています。軽度の障害者は病院ではなく町で過ごす必要がありますが、その受け皿が特に地方では足りていません。そこで、株式会社「SUN」の設立ならびに障害者グループホーム「さん」をつくろうと発案し、2021年に第1号を開設。運営してみるとやはりニーズがとても高く、2022年に2つ目、2024年に3つ目を同じ新潟市西区につくりました。



障害者グループホーム「さん」の外観

佐渡の医療に強い危機感「崩壊している」

――そして、2025年4月にこれまでの活動を集約する意味も含め、自身のブランドを「Omni Color Opus（オムニカラーオーパス）」と命名。同年9月にフリーアナウンサーやアーティストなどを招いて新潟の未来を語り合うイベントを主催しました。医師としては珍しい取り組みだと思います。

「地域を芸術作品のようにつくっていきたい」――。ブランド名にはこんな私の思いを込めました。OmniとOpusはいずれもラテン語に由来する言葉で、前者は「全ての」、後者は「作品」という意味があります。「色」を意味するColorはここでは「人々」「文化」「ニーズ」といった多様な個性を表しています。医療、介護、福祉という専門性の異なる人たちが連携し、個々の強みを生かしながら地域社会に貢献していきたい思いを反映しています。

イベントを開いたのは、シンプルに佐渡市の医療状況や私たちの活動を知ってほしかったためです。Omni Color Opusのホームページにもつづりましたが、私の感覚では佐渡の医療は崩壊しており、強い危機感を感じています。島の基幹病院は時おり入院制限がかかるほど手一杯で、地域の高齢者には運転免許を返納したことなどによって医療機関までのアクセスがなくなり、受診できなくなっている人がたくさんいます。新潟県は全国的にも医師が少なく、特に佐渡市を始めとする地方では医療従事者が大きく不足しています。私が管理医師を務める佐渡市小木診療所では常勤の診療放射線技師がいないため、レントゲンを撮れる日も限られる状況です。人が少ないので看取りも難しく、佐渡は「死ねない島」になりつつあります。

こんな状況を知ってほしい、一大事として考えてほしい思いから、2025年9月19日に新潟随一の高さを誇り、佐渡が一望できるコンベンション施設「朱鷺メッセ」最上階の展望室でイベント「MIRAI」を開きました。当日は80人ほどが参加してくださいました。

――最後に、今後の展望をお聞かせください。

「へき地医療を気楽に楽しく」をコンセプトに、佐渡で医療に携わる仲間を増やしたいと考えています。「へき地医療」と聞くと少し重たいイメージを受ける人がいると思いますが、医療従事者が気軽に参加できるような雰囲気や仕組みをつくりたいです。島の基幹病院と連携して佐渡市小木診療所を始めとする島内のへき地で診療する教育プログラムをつくる、DX（デジタル・トランスフォーメーション）を進めてクラウド上に病院の医局のような空間をつくって相談し合えるようにする、内地や遠隔から佐渡の医療をサポートできるようにする、といったことを構想しています。先に挙げたブランド化やイベント開催も雰囲気づくりの一環です。

佐渡は景色が美しく、人が優しい。魚や酒がおいしく、また果物の宝庫でもあります。国も総合診療医の育成に注力しており、時代の追い風を感じています。医師を始めとする医療従事者の方にはぜひ、何かの折に魅力的な場所で

ある佐渡を思い出していただきたいですね。共に楽しく、活動できるとうれしいです。

青と緑が広がる佐渡市の風景

◆野沢 有二（のざわ・ゆうじ）氏

2000年埼玉医科大学卒。武蔵野総合病院や亀田総合病院の整形外科を経て、2011年に小笠原村診療所に勤務。2013年に故郷の新潟県に戻り、佐渡市で医療活動を開始。2020年から佐渡市小木診療所管理医師。新潟市でも医療・介護事業を行う。日本整形外科学会整形外科専門医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太（写真は野沢氏提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索